Chopin

19

Valse

黒田ゆか ピアノリサイタル2004

～ショパンワルツ全19曲を奏でる～

2004.12.7（tue）19:00

熱田文化小劇場

マネージメント：***RUNDE***

Program

ホ長調のワルツ 遺作（1829）
Valse No.15 en Mi majeur KK IV a Nr.12

変イ長調のワルツ 遺作（1827）
Valse No.14 en La♭ majeur KK IV a Nr.13

変ホ長調のワルツ 遺作（1829）
Valse en No.19 en Mi♭ majeur KK IV a Nr.14

別れのワルツ 変イ長調（1835）
Valse No.9 en La♭ majeur Op.Posthume 69 Nr.1

変ニ長調のワルツ 作品70-3（1829）
Valse No.13 en Re♭ majeur Op.Posthume 70 Nr.3

子犬のワルツ 変ニ長調（1846-47）
Valse No.6 en Re♭ majeur Op.64 Nr.1

変イ長調のワルツ 作品42（1840）
Valse No.5 en La♭ majeur Op.42

華麗なる円舞曲 ヘ長調 作品34-3（1838）
Valse No.4 en Fa majeur Op.34 Nr.3 (grande valse brillante)

ロ短調のワルツ 作品69-2（1829）
Valse No.10 en si mineur Op.Posthume 69 Nr.2

嬰ハ短調のワルツ 作品64-2（1846-47）
Valse No.7 en ut♯ mineur Op.64 Nr.2

変ト長調のワルツ 作品70-1（1835）
Valse No.11 en Sol♭ majeur Op.Posthume 70 Nr.1

イ短調のワルツ 遺作（1843）
Valse No.17 en la mineur KK IV b Nr.11

ホ短調のワルツ 遺作（1830）
Valse No.16 en mi mineur KK IV a Nr.15

華麗なる大円舞曲 変ホ長調（1831）
Valse No.1 en Mi♭ majeur Op.18 (valse brillante)

華麗なる円舞曲 イ短調 （1831）
Valse No.3 en la mineur Op.34 Nr.2 (grande valse brillante)

変イ長調のワルツ 作品64-3（1846-47）
Valse No.8 en La♭ majeur Op.64 Nr.3

ヘ短調のワルツ 作品70-2（1843）
Valse No.12 en fa mineur Op.Posthume 70 Nr.2

変ホ長調のワルツ 遺作（1840）
Valse No.18 en Mi♭ majeur KK IV b Nr.10

華麗なる円舞曲 変イ長調（1835）
Valse No.2 en La♭ majeur Op.34 Nr.1 (grande valse brillante)

ショパンのピアノ音楽と<ワルツ>について

黒田 ゆか

ピアノという楽器についてあらためて考察することで、フランスで学んだピアノ奏法についての奥義を深く噛みしめているところです。

私はダンスレッスンを始めて3年になりますが、たとえばダンサーやバレリーナの脚さばきは脚の動きのみによるものではありません。躰の核となる部分を感じ、そこに呼吸を吹き込み集中力を高め、その核なる部分と頭から脚先にいたる末端のバランスを丁寧に感じ入らねば本物の動きは捉え切れません。無論習い始めて数年の序の口にマスター仕切るものではありませんが、指の動きについてオーバーラップするところは多分にあります。私はピアノ演奏についてそういった総合的な反省点を基にフランスで学び、見、聴き知ったことについて様々の研鑽を重ねてきました。とりわけピアノテクニックを多角的に捉えるジャン=フィリップ・コラール氏のレッスンに影響を受けた部分は大きいと思います。

ある時、ふとピアノ演奏と倍音バランスとの関係に思いを巡らせた。ピアノは扱う音が多い分考えられる倍音バランスの組み合わせはペダルの効果も入れれば星の数にもなるだろう。ショパンのワルツリズムの音素材に或る音aの上方の属七形を考えると、それはa音上の倍音と重なる。或る音aオクターブの倍音を利かせておいてそこに属七の弱拍がなる。…その上に来るメロディは、おなじトーンのちがう色かもしれない。まさに同じ色調の絵の具でグラデュエーションをつけてゆく感覚だ。

パリ時代のショパンはジョルジュ・サンドを介し、同時代のさまざまな芸術家たちと知り合い、殊に画家ドラクロワに影響を受けながら音楽上の色彩効果を追求してゆきます。オペラが好きだったショパン。一時はオペラ作家としての道も考えた彼が、ピアノという楽器を選んだのです。ひとつの音を鳴らしつつ、その倍音をかき分けながら次に来る音たちを紡ぎ、フレーズを創り上げてゆく。倍音のカオスのなかで、音の方向を予測する。Bass倍音の上方にとることもあればその逆もあり得るし、時間差で協和が現れることもある。ピアノという楽器をあらためて考える。指が鍵盤を押し下げる。そのタッチの重さがハンマーを伝って弦を振るわせ、1本の弦の振動がそのまた倍音上の弦の振動を促し、それらすべての波動が響板をつたって聴き手に思いを投げかける。奏者は直接に弦を触れることはめったにないが、ピアノは構造を考えれば弦楽器である。ショパンの時代から今もっていろいろなタイプの演奏があり、演奏法がある。しかしこうして考えれば、ショパンの説こうとしたピアノ奏法とピアニズムはピアノの本質に適う。

さてショパンは1810年ポーランド生まれですが、20才の時に故郷を離れ、ウィーン、ミュンヘン、シュトゥットガルトなどを経てパリに住まいを構え、サンドとの結婚後はフランス内のノアンやマジョルカ島に移り住んだ時期もありますが、39才でパリに没した作曲家です。こうして人生の後半をパリで過ごし自分の音楽語法を完成させたショパン作品のなかに私はフランス語の語感を感じますし、彼がピアノの発展と共に築き上げたピアニズムの世界にフランスのエスプリを感じずにはいられません。邦楽に3拍子の曲はない、と言われます。日本人のDNAには組み込まれてないかもしれないワルツリズム。…ショパンのワルツは19曲残されていますが、なかにはマズルカを思わせるような叙情を感じさせるもの、オペラアリアのようにこころに深く浸み入る歌曲もありますし、当時のウィーンの娯楽音楽作曲家J・シュトラウスに対抗してか、僕は踊るためのワルツは書かない、と言いながらも形式的にはウィンナワルツにほかならないもの、そして独自の和声にもとづくショパンのピアニズムをじわりと聴かせるもの。…高雅に洗練された3拍子の世界で、さまざまな味わいを一夜にしてお楽しみいただきたい。

そして、今もってまったくムダのない適切なアドバイスをくださる小林 仁氏、第1回リサイタル以降つねに私の音楽にグローバルな示唆を与え続けてくださっている湯浅譲二氏の両氏に敬意を表しつつ、これまで本当にたくさんの音楽の先達の方々によって育み支えられてきた私の<音の探求>の礎の部分だけでも、今夜発揮することができればと思っています。

東京音楽大学ピアノ専攻卒業。1989年から98年の間6夏にわたり渡仏、1990年には第4回名古屋市新進芸術家海外研修生に選考され、ニース国際夏期アカデミー及びパブロ・カザルス音楽祭夏期アカデミーを10期修了する。この間パスカル・ロジェ氏、ジャン=フィリップ・コラール氏に継続して師事し、ピアノ演奏の根本原理から演奏家の精神性、実践上の表現効果まで数々のことを学ぶ。日本新交響楽団とのコンチェルト共演、プランタン銀座(東京)での「エリック・サティ展コンサート」などのほか、「CBCサロンコンサート」「名フィル+αコンサート」「ルンデ音楽する仲間たち」「アンサンブル・トゥデー・コンサート」などのシリーズコンサートに出演。1991年の「ピアノ&オーボエ・ジョイント・リサイタル」では、"自由で闊達なピアノを聴かせるピアニスト"、"日本人離れした音楽性"と音楽専門誌にて評された。1988年第1回リサイタルの後、97年、98年、99年にソロ・リサイタルを開催。また2001年6月愛知芸術文化センター大ホールでの愛知県建設業災害防止大会コンサートタイムでソロ・リサイタルを好演。03年12月、名フィルオーボエ奏者山本直人氏とクリスマス・デュオ・コンサートを開催。故前川幸子、小林 仁、故ピエール・バルビゼ、パスカル・ロジェ、ジャン=フィリップ・コラール各氏に師事。大学在学中より作曲家湯浅譲二氏の<音楽と人間をめぐる考察>に強く影響を受け、今に至っている。文豪江戸川乱歩の従兄弟の孫。